

ビリーと仲間達 ちょうどが なにより

問題は、ウサギのビリーが何でもかんでももっと欲しいと思っ
た時に始まりました。

「お父さん。ぼく、自転車をもう1台欲しいんだけど。」

ある日の朝食の時に、ビリーが言いました。

お父さんは、読んでいた新聞から目をあげて言いました。

「おや。去年たん生日にあげた自転車は、どうなったんだい？」

「それは、去年の自転車でしょ。それに、色は青だし。

今年ぼくが好きな色は、赤なんだ。」ビリーはどうしても、
もう1台の自転車がほしくなったのです。結局のところ、
二つのほうが一つよりいいにきまっています。お父さんだって、
ずっと前にそう言ったはずだ、とビリーは思いました。

お父さんは、ビリーを見て考え込みました。しばらくして、
お父さんは口を開きました。「自転車がもう1台欲しいなら、
そのためのお金をかせがないとな。」

「でも、一体どうやって？」ビリーが聞き返しました。
そのようなことは、今までにすることがありません。

「リスのスヴェンさんのために木の実集めを手伝うとか、
銀行家のアナグマさんの家の芝刈りをするとか、おまえが
手伝える仕事はいくらでもあるぞ。」

「わかった。そうするよ。」ビリーがうなずきました。

ビリーは、銀行家のアナグマさんの家の庭の芝刈りを
する仕事をもらいました。それに、リスのスヴェンさんの
ための木の実集めの仕事も。学校が終わるとビリーは、
友達と遊ぶのはやめて、これらの仕事をするために時間を
費やしました。やがてお金がたまり、2台目の自転車を
買うことができました。ピカピカの赤い250トリプルX
レーサーです。



ビリーの 2 台の 自転車は、学校中の うわさになりました。親友の ハリネズミの アレックスは、ビリーの 家に 遊びに行っても いいかと 聞いてきました。ビリーの 自転車に 乗って みたかったのです。「たぶん、明日ね。」と ビリーが 答えました。ビリーは、2 台の 自転車を持っていることで みんなから 注目を 浴び、得意になっていました。それで すぐに、今度は 何を 買おうかと 考え始めたのです。

ビリーは、何かが 一つ 欲しいというのではなく、何でも もっと あるほうが いいと 思うようになってしまいました。

ビリーは おばあちゃんに 頼み込んで、イヤーマフスまで もう一つ 買ってもらいました。まだ 真夏だ というのにです。学校の カフェテリアでは、シェフの クラリスさんに フライを 二人分も 頼みました。お母さんの お使いで

町の スーパーに行った 時は、買い物リストにある 物を すべて、2 倍も 買ってきてしまいました。

その日 ビリーは、2 袋の じゃがいもと、2 かごの にんじんと、2 袋の 砂糖と、2 袋の 小麦粉を、持って 帰ってきました。全部 持ち帰るために、

ハリー・マーケットの ショッピングカートまで 借りなくては ならない 始末でした。

「あらまあ！」 ビリーのお母さんは 目を 丸く しました。「一体、何を 考えてるの？」



「余分な食べ物、ぼくの部屋に置いていいから。」とビリーが言いました。

「それはもっともね。食料庫には、そんなにたくさん置く場所はないもの。」お母さんもうなずいて言いました。

夕食を済ませてビリーが自分の部屋にもどると、部屋は前よりも小さく なってきているようでした。ビリー自身も小さく なっているように感じたほどです。食料品の袋や、彼がためこんだ「余分な」もののすべてが部屋の大部分をふさいでいて、ビリーはベッドにたどり着くのに、山積みされたいろいろな物の間をかき分けて通りぬけなくてはなりませんでした。（そろそろ二つ目の部屋が必要だなあ。）と思いながら、ビリーは眠りにつきました。

翌朝、ビリーはごきげんななめでした。ちっとも眠れなかったのです！ ベッドにのっている大きなじゃがいもの袋と、それぞれ2つずつそろったぬいぐるみのせいで、ビリーはふきげんになっていました。

昼食の時間になって、ビリーは親友のアレックスのとなりにすわりに行きました。ビリーの気分がしずんでいる時にはいつでも、アレックスが一生けんめい元気づけてくれるからです。

「ああ…。やあ、ビリー。」アレックスはびっくりした表情で、食べていたサンドイッチから目をあげました。

ビリーは、アレックスのそばにあったただ一つの切り株にドサッと腰を下ろして言いました。「ぼく、めちゃめちゃな気分なんだ！」

ちょうどその時です。キジのフィスクがやって来ました。「ビリー、悪いんだけど。アレックスがお昼をいっしょに食べようってさそってくれたんだ。」フィスクは、困った顔をしながら言いました。

「何だって？」アレックスのほうを向きながら、ビリーが言いました。「だけどぼくたち、いつもいっしょにお昼を食べてるじゃないか。」

「それでもないよ。」アレックスが静かに言いました。「もう何週間も、いっしょに食べに来てないじゃないか。ぼくはさびしかったから、お昼をいっしょに食べようって、フィスクをさそったんだ。」

君はもう、ぼくと遊ぶ時間はないみたいだし。君は、次にどんな物をもっと手に入れられるかってことしか考えてない。だから、君にとってはぼくがいたって何にもならないんじゃないかって思い始めたんだ。」

ビリーは、ぶんぶんおこりながら行ってしまいました。アレックスは、一体何が何だか分かりません！

ビリーは家に帰るところでした。ところが、ウサギ一家の巣穴に近づいたころ、何かがいつもとちがうことに気づきました。おまわりさんのコナーさんと消防士のファーガスさんが、ビリーのお父さんとお母さんといっしょに、彼らの家の入口に立っていました。

ビリーが家のそばまで行くと、お父さんが歩み寄って肩に手をかけました。「ビリー。」お父さんの声はやさしいけれど、深刻なひびきをもっていました。「おまえの部屋は、床がぬけて下の食料庫の上に落ちたんだ。ベッドルームとしては十分じょうぶな床だが、おまえが部屋の中にためこんだ物の重みをすべて支えられるほどじょうぶにはできていなかったからな。食料庫とおまえの部屋の床を直すにはしばらく時間がかかるから、おまえはそれまでの間、弟の部屋をいっしょに使わせてもらうんだな。」

ビリーは何か言おうとして口を開きましたが、言葉が出ません。いろいろ考えようとしましたが、思い浮かぶのは、親友を失ったということだけでした。それも、ビリーの部屋の床をめちゃくちゃにした、たくさんのばかばかしい物のためにです。

「おまえが宝物を集めるのをじっと見ていたんだがね。」とお父さん。「何か言うべきかとは思ったが、まずは、物を集めても幸せにはなれないということをおまえ自身で経験してほしかったんだ。おまえの部屋の床が、こういった余分な物のために作られていないように、おまえの人生と心だって、入れられるものには限りがある。本当に必要としているわけでもない物でいっぱいにしてしまうなら、人生で本当に必要なもののための余地がなくなってしまうのだよ。」

ビリーは、アレックスのことを考えていました。「親友とか？」

「そうだよ。友達といっしょに過ごすほうがいい時間などもだ。」

「でも、余分な時間を過ごすことがいいこともあるの？」ビリーがたずねました。

「それが他の人と分かち合うためなら、余分はいいものだ。必要な人達と分かち合うならね。だが、そうでなければ、ちょうどが最善なんだよ。」

ビリーがお父さんのほうを見て言いました。「アレックスに会いに行っている？ もうずいぶん長いこと、いっしょに遊んでないんだ。アレックスがいないとさびしいよ。」

「ああ、いいとも。」お父さんはビリーにハグをして言いました。

ビリーは走り出しました。部屋の床がぬけた時、ほとんどの物はダメになりましたが、友達のアレックスがいるなら、それで十分だとわかったのです。

お
終わり

